



Title	『内裏詩歌合』における『和漢朗詠集』の利用方法
Author(s)	黄, 夢鴿
Citation	語文. 2023, 120, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95414
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『内裏詩歌合』における『和漢朗詠集』の利用方法

黄 夢 鶴

はじめに

詩歌合とは、詩合形式と歌合形式を結合し、漢詩と和歌を番いとするものである。元久二（一二〇五）年以後鳥羽院が主催した『元久詩歌合』は詩歌合の規範とされている。その後、順徳天皇内裏で詩歌合が盛行し、建暦三（一二二三）年二月二十六日に『内裏詩歌合』が催された。『内裏詩歌合』は二題各二十六番、計五十二番の詩歌からなる。「山中花夕」と「野外秋望」との二題のもとに、題ごとに漢詩と和歌を二首ずつ詠んでいる。詩人としては、藤原範時・平経高などの十三名、歌人としては、藤原良平・藤原定家・順徳天皇などの十三名が列座している。完本の現存する詩歌合が少ない中で、初期の詩歌合の詠法を考察するのに重要な作品である。そして、順徳天皇内裏で行われた詩歌合のうち、『内裏詩歌合』は現存する唯一のものとして、順徳天皇を中心とする建暦・建保期の詩壇・歌壇の活動や当時の和歌と漢詩の詠法をうか

がえる一資料といえる。

しかしながら、詩歌合について、従来の研究は『元久詩歌合』を中心に扱っており、『内裏詩歌合』に目を向けていない。実際に見てみると、『内裏詩歌合』には『元久詩歌合』に見えない特徴もある。例えば、『元久詩歌合』の漢詩句では『和漢朗詠集』の利用が少ないのに対し、『内裏詩歌合』の漢詩句においては『和漢朗詠集』の表現を用いる場合が多く見られる。当時の詩歌合の詠法を知るために、『元久詩歌合』のみならず、『内裏詩歌合』の詠法も踏まえて考える必要があるだろう。さらに、唐沢正実氏が指摘するように、『内裏詩歌合』に出詠している漢詩の作者は、菅原為長や藤原資実など前代以来の儒者だけでなく、順徳天皇の近臣など歌人も多く存在する。¹漢詩と和歌の詠法を考える際に、作者は儒者なのか、歌人なのかという点を考慮することも重要であろう。

そこで、本稿では『内裏詩歌合』に注目し、特にその漢詩句における『和漢朗詠集』の利用方法について考察する。そして、作

者によってどのような特徴が見られるのかを検討し、『和漢朗詠集』の利用方法と作者との関連も考えたい。

一、破題における『和漢朗詠集』の利用

詩歌合における漢詩句は、句題で詠まれたものではないが、句題詩の詠法と深く関わっている。句題詩は五文字からなる題で詠まれたもので、平安中期以降、日本独自の規則が形成されていた。一首を構成する首聯・頷聯・頸聯・尾聯はそれぞれ「題目」（題字をそのまま用いる）・「破題」（題字をその文字から連想する別の表現に言い換えて題意を表現する）・「本文」（故事を用いて題意を表現する）・「述懷」（作者自身の感懷を述べる）と規定されていた。⁽²⁾ 頷聯と頸聯は対句を用いて、題字をそのまま使用せず、他の表現に置き換えるという破題的詠法を用いる。このような詠法を踏まえ、堀川貴司氏は詩歌合の詠法について、特に『元久詩歌合』の漢詩句に注目し、題の文字を用いてはいけないというルールを破るものが見えるが、同一詩人によって詠まれた前後二聯は句題詩の対句部分（頷聯・頸聯）の破題的詠法をある程度守ろうとする姿勢が見て取れることを明らかにした。⁽³⁾ 『内裏詩歌合』の漢詩句も、先行研究に指摘されるように、脚韻や平仄から見ると、一首の対句部分と理解できる。⁽⁴⁾ そして、具体的な詠法も『元久詩歌合』と同様に、題字を用いないという規則を守っていない例が見られるものの、題の文字を他の表現に言い換えるという句題詩における破題的詠法が基本となっていると考えられる。

さらに、句題詩の破題作成において、『和漢朗詠集』は重要な取材源として用いられた。佐藤道生氏が述べるように、『和漢朗詠集』は鎌倉期以降、幼学書の一つに加えられるようになり、破題製作に有効な基本的語彙を提供していた。そして、その中に設けられている朗詠題には、春・夏・秋・冬・雑にわたるおよそ一一〇の項目があり、四季の景物から人事に至るまで、詩歌の主題が網羅されており、平安後期の詩人が朗詠題を頼りに破題の表現を得ていた。⁽⁵⁾ 具体的な例としては、佐藤論にも取り上げられた藤原忠通（一〇九七—一一六四）の『法性寺殿御集』の漢詩を見てみよう。

まず、「雪裏老人思」（雪裏 老人の思ひ）を題とする句題詩が挙げられる。

繽紛雪裏眠方驚	繽紛たる雪の裏 眠り 方に驚く
翫此老人感恩成	此を翫びて 老人 感恩成る
携杖路深盈尺曉	杖を携へて路深し 尺に盈つる曉
懸車跡斷積庭程	車を懸けて跡断ゆ 庭に積る程
漢朝四皓花前興	漢朝の四皓 花前の興
天寶遺民月下情	天寶の遺民 月下の情
行客香山初至夜	行客 香山に初めて至る夜
更看鶴髦逐風輕	更に看るに 鶴髦 風を逐ひて輕し

この一首の頸聯は、対句を用いて句題を詠んでおり、題の「老人」を言い換える際に「天寶遺民」という表現を使っている。「天

宝遺民」は天寶（唐の玄宗の治世後半に使用された元号）時代の生き残りの人々という意味を表し、『和漢朗詠集』の「老人」題に収められている白居易詩の「再三憐汝非他事、天寶遺民見漸稀」（再三汝を憐れぶことは他の事に非ず、天寶の遺民は見るに漸く稀なり。724）に見られる。題「雪裏老人思」を言い換える際に、作者は「老人」という朗詠題を参照してその下にある漢詩句の表現を利用してと考えられる。

また、「入夜有虫声」（夜に入りて虫の声有り）という句題で詠まれた次の一首もある。

虫声満耳感難禁	虫の声	耳に満ちて感ずること禁じ難し
入夜愁人動寸心	夜に入りて人を愁へしめ	寸心を動かす
臥聽孤床鳴自近	臥して孤床に聴けば	鳴くこと自ら近し
起依暗壁織猶深	起きて暗壁に依れば	織ること猶ほ深し
先当新月雖添響	先に新月に当りて響きを添ふと雖も	
終到明朝定罷音	終に明朝に至りて定ず音を罷む	
蟋蟀韻寒腸已斷	蟋蟀 韻寒くして 腸 已に断つ	
箇中移座苦相尋	箇中 座を移して苦だ相ひ尋ぬ	

頷聯では、句題の「虫声」を表すために、「虫」という朗詠題にある橘直幹の「山館雨時鳴自暗、野亭風処織猶寒」（山館の雨の時鳴くこと自ら暗し、野亭の風の処 織ること猶ほ寒し。330）という摘句から、虫の鳴き声を表す「鳴自……」および機を織るのに聞

こえる蟋蟀の鳴き声を表す「織猶……」を取り入れている。

このように、句題詩の作成にあたって、『和漢朗詠集』から破題の表現が選ばれていた。さらに、朗詠題は破題の表現を見出す手掛かりでもあった。

それでは、句題詩の破題的詠法と深く関わる『内裏詩歌合』の漢詩句はどのように詠まれているのか。上記のような詠法を踏まえ、『内裏詩歌合』の漢詩句では、題を表現する際に『和漢朗詠集』がどのように利用されているのかについて考察していきたい。

二、『内裏詩歌合』の漢詩句における『和漢朗詠集』の破題的利用

前述したように、『内裏詩歌合』の漢詩句において、『和漢朗詠集』の表現を用いる場合が多く見られる。句題詩の破題における『和漢朗詠集』の利用と同じように、『内裏詩歌合』では、題字を言い換えるために『和漢朗詠集』の表現を使用するものがある。本節では、『内裏詩歌合』の漢詩句における『和漢朗詠集』の破題的利用について検討する。

まず、単独の表現を取り入れるものとして、次の例が挙げられる。

① 「山中花夕」題・十五番・藤原家宣
雲色帰溪憑柳宿 雲色は溪に帰りて柳に憑りて宿す
月光銜嶺出花遲 月光是嶺を銜みて花より出づること遅し
・和漢朗詠集・山家・562・橘直幹

触石春雲生枕上 石に触るる春の雲は枕の上に生る
銜嶺曉月出窓中 嶺を銜む曉の月は窓の中より出づ

②「野外秋望」題・三番・藤原資実

隼撃林梢飛鳥少 隼 林の梢を撃ちて 飛鳥少なし

馬嘶原上獵徒多 馬 原の上に嘶えて 獵徒多し

・和漢朗詠集・秋・雁付補雁・321・菅原道真

雁飛碧落書青紙 雁 碧落到に飛びて 青紙に書せり

隼撃霜林破錦機 隼 霜林を撃ちて 錦機を破る

③「野外秋望」題・八番・源通方

低雲連野遠鴻滅 低雲 野に連なりて 遠鴻滅ゆ

爽籟興林睡鹿驚 爽籟 林に興りて 睡鹿驚く

・和漢朗詠集・山・495・大江以言

衆籟曉興林頂老 衆籟 曉に興りて 林の頂老いたり

群源暮叩谷心寒 群源 暮に叩きて 谷の心寒し

①では、「山家」という朗詠題に収められる摘句の表現「銜嶺・月出…」を用い、峰にかかる月が上に昇って現れてくることを詠んで、題の「山中」と「夕」を言い換えている。②では題の「野外」と「秋」を詠む際に、「雁」という朗詠題にある漢詩句の表現「隼撃（霜）林」を利用してゐる。③は朗詠題「山」に収録されている摘句の「籟・興林」という表現を取り入れ、題の「野外秋」を表している。朗詠題の「山家」は「山」という題の「山中花夕」と共通する文字を持っている。「雁」は秋の景物として漢詩と和歌

によく詠まれる表現であり、題中の「秋」に関わる。「山」は「山野」などのようによく「野」と一緒に詠まれることにより、題の「野外」と互いに連想される。このように、『内裏詩歌合』では、詩歌合の題と一致する文字を持つ朗詠題のみならず、題字から連想できる朗詠題も手掛かりとして、題を言い換える表現を見出す場合が見られる。

そして、『内裏詩歌合』では破題するために、『和漢朗詠集』における摘句の対句表現をセットで取り入れる例も多い。それは「対句表現をそのまま用いて破題する場合」と「対句表現を工夫して破題に用いる場合」に分けられる。

まず、「対句表現をそのまま用いて破題する場合」として、藤原頼範が「山中花夕」題で詠んだ次の一聯（十二番）を取り上げる。

④与鳥帰林期曉月山中夕

為花借宿入春雲山中 鳥と林に帰りて 曉の月を期す
花が為に宿を借りて 春の雲に入る

頼範は『和漢朗詠集』の「山家」題に収められる「触石春雲生枕上、銜峯曉月出窓中」（用例①参照）という摘句の表現「春雲」と「曉月」を取り入れ、それぞれ題の「山中」と「夕」を詠みかえている。

また、「山中花夕」題で詠まれた平経高の一例（三番）も挙げられる。

⑤ 煙霞^花林遠暮雲掛 煙霞の林遠くして 暮雲掛る
桃李^花蹊深春日垂 桃李の蹊深くして 春日垂る

・山腰^花婦雁斜牽帶、水面新虹未展巾

(和漢朗詠集・秋・雁^付婦雁・325・都在中)

この一聯は題の「花」を表現する際に、『和漢朗詠集』の「煙霞遠近応同戸、桃李浅深似勸杯」(煙霞の遠近は同戸なるべし、桃李の浅深は勸杯に似たり。40・菅原道真)という摘句から、「煙霞」と「桃李」を取り入れているのではないかと考えられる。さらに、その摘句の朗詠題は「三月三日付桃」であり、題の「花」に関連している。

上記の例以外に、題を言い換えるために『和漢朗詠集』の対句表現を利用する漢詩句は、次のように列挙できる。

⑥ 攀艷^花共帰樵客路、耽粧^花欲宿隱倫家

〔山中^花夕〕題・九番・藤原範朝

・大庾嶺之梅早落、誰問粉粧
匡廬山之杏未開、豈趁紅艷

(和漢朗詠集・春・柳・106・大江維時)

⑦ 客路送薰^花新月影、樵衣惟馥暖風辰

〔山中^花夕〕題・二十六番・藤原範宗

・曲驚楚客秋絃馥、夢斷燕姬曉枕薰

(和漢朗詠集・秋・蘭・289・橘直幹)

⑧ 月浮水面寒花白、霧斷山腰遠雁低

〔野外^花秋望〕題・十番・藤原頼範

⑥は「柳」という朗詠題の摘句における「艶」と「粧」、⑦は朗詠題「蘭」における花を表現する「馥」と「薰」を用いて題の「花」を言い換えている。⑧は「雁付婦雁」という朗詠題に収められる摘句の「水面」と「山腰」雁を利用し、題の「野外秋」を詠んでいる。さらに、朗詠題について、⑥の「柳」は春の景物であり、そして春から花も連想されるため、「柳」は題の「花」に関連していると考えられる。⑦の「蘭」は蘭花であり、題の「花」に関連する。⑧の「雁付婦雁」は秋の景物として、題の「野外秋望」と関連する。

以上のように、『和漢朗詠集』の対句表現をそのまま利用して題を言い換える例が多く見られる。そして、題に関わるあるいは題から連想できる朗詠題によって、破題のための表現を選択する傾向がうかがえる。

続いて、『和漢朗詠集』の「対句表現を工夫して破題に用いる場合」について具体的に見てみよう。まず、菅原為長の二聯を取り上げる。

⑨ 〔山中^花夕〕題・五番

一日遊春^花婦帶月 一日春に遊び 帰るに月を帶ぶ
双雲^花為雪老眠^花 双雲雪と為り 老いて花に眠る

・和漢朗詠集・**僧**・605・鮑溶^①

野寺訪僧^望掃帶月 野寺に僧を訪ひて 帰るに月を帶ぶ

芳林携客^望醉眠花 芳林に客を携へて 酔ひて花に眠る

⑩「**野外秋望**」題・五番

白鷺^望双飛^望秋^望沢^望雪 白鷺^望双びに飛ぶ 秋沢の雪

紅梢^望半出^望暮山雲 紅梢半ば出づ 暮山の雲

・和漢朗詠集・**山水**・501・白居易

碍日暮山^望青簇簇 日を碍ふる暮山は青くして簇簇たり

浸天秋水^望白茫茫 天を浸す秋水は白くして茫茫たり

⑨は題の「花夕」を表現する際に、『和漢朗詠集』の摘句における「掃帶月」と「醉眠花」をセットで用いている。朗詠題の「僧」は題の「山中」に関わる。しかし、「醉眠花」はそのまま用

いられるのではなく、「醉」という文字が「老」に置き換えられている。⑩は『和漢朗詠集』の漢詩句における「暮山」と「秋水」を利用して、題の「野外」と「秋」を詠んでいるが、「秋水」は「秋沢」に言い換えられている。そして、朗詠題の「山水」は題の「山」と共通する文字を持っている。そのほかにも、次の例が見られる。

そのほかにも、次の例が見られる。

⑪桃溪浪洗斜陽影、梅嶺風芳欲夜声

〔山中花夕〕題・二番・藤原範時

・氣霽風梳新柳髮 水消浪洗旧苔簷

〔和漢朗詠集・春・早春・13・都良香〕

・槐花雨湿新秋地 桐葉風涼欲夜天

〔和漢朗詠集・秋・早秋・209・白居易〕

⑫風生村柳多黃落、月透野松帶翠氛

〔野外秋望〕題・六番・菅原為長

・風生竹夜窓間臥 月照松時台上行

〔和漢朗詠集・夏・夏夜・151・白居易〕

⑬寒野鹿踪穿霧見、暮山雁陣與雲斜

〔野外秋望〕題・十一番・藤原範時

・霜鶴出皋披霧舞 孤帆連水與雲消

〔和漢朗詠集・晴・413・菅原文時〕

⑭蘭叢露馥風千畝、木葉秋紅霜一村

〔野外秋望〕題・十七番・藤原兼隆

・露滴蘭叢寒玉白 風銜松葉雅琴清

〔和漢朗詠集・秋・露・339・源英明〕

これらの例も⑫と⑬を除くと、□部分が示すように、題と同じ文字を持つ、あるいは題字から連想される朗詠題を頼りに表現を見出す姿勢がうかがえる。

これまでの考察により、『内裏詩歌合』の漢詩句では、破題する際に『和漢朗詠集』における単独の表現と対句表現を取り入れる例が見られる。そして、『和漢朗詠集』の対句表現を詠み込む場合は、そのまま用いる場合と表現を変えて利用する場合に分けられ

る。全体的に見ると、題字に関わる朗詠題を手掛かりとして破題の表現を得る傾向が見える。

以上、『内裏詩歌合』における『和漢朗詠集』の破題の利用について考察してきた。しかしながら、『内裏詩歌合』では、漢詩句を作る際に、『和漢朗詠集』の表現を破題に利用する場合のみならず、題と関係なく言葉のみで取り入れる場合も見られる。次節では破題以外の利用について検討する。

三、『内裏詩歌合』の漢詩句における『和漢朗詠集』の破題以外の利用

『内裏詩歌合』の漢詩句における『和漢朗詠集』の破題以外の利用も「単独の表現を取り入れる場合」と「対句表現を取り入れる場合」に分類できる。

まず、「単独の表現を取り入れる場合」として、藤原教実が「山中花夕」題によって詠んだ一聯（十七番）がある。

⑮唯逗春山^{山中花}応^タ宿 唯だ春山に^{とど}逗みて^{さだ}応に宿を^す卜むべし
縦覃^タ西日^タ欲何之 縦ひ西日に覃^おべども何^いくか之^かかむと欲^する

この二句は『和漢朗詠集』「述懷」題の摘句、白居易の「事無成身也老、醉郷不知欲何之」（事に成すこと無くして身也た老いたり、酔郷を知らずして何くか之かむと欲る。756）の「欲何之」という言葉を用いている。「欲何之」は白居易の好む表現であり、

『白氏文集』に数例見られる。教実が直接『白氏文集』からこの表現を取り入れた可能性もあるが、前述したように、『内裏詩歌合』では、詩句作成にあたって『和漢朗詠集』の表現を用いる場合が数多く見られることを勘案すれば、この教実詩の「欲何之」は『白氏文集』というより『和漢朗詠集』から学んだ表現と考えるべきであろう。そして、「欲何之」はこの一聯では題を言い換える表現として用いられているわけではない。

次に『和漢朗詠集』の対句表現を詠み込む例を検討する。藤原頼範による漢詩句（「山中花夕」題・十一番）が挙げられる。

⑯嶺梅^{山中花}遠^タ近^タ隨嵐^タ馥 嶺梅の遠近は嵐に随ひて馥る
野杏^{山中花}淺^タ深^タ秉燭^タ分 野杏の淺深は燭を秉りて分つ

この一聯は、『和漢朗詠集』の「三月三日付桃」題に収められる摘句「煙霞遠近応同戸、桃李淺深似勸杯」（用例⑤参照）の「遠近」と「淺深」を利用していると考えられる。朗詠題の「三月三日付桃」は題の「花」に関わるが、『和漢朗詠集』から取り入れられた「遠近」と「淺深」は題「山中花夕」の文字を言い換えるものではなく、具体的に花の状態を描写する表現として用いられている。これと同様に、藤原範朝も「野外秋望」題で下記の漢詩（一番）を詠んでいる。

⑰松蓋^{野外}雨時^タ応^タ宿客 松蓋 雨の時に^{とど}応に客を宿むべし

蘆花風^{野外秋}処^望似招人 蘆花 風の処に人を招くが似し

範朝詩は「虫」という朗詠題の摘句「山館雨時鳴自暗、野亭風処猶猶寒（山館の雨の時 鳴くこと自ら暗し、野亭の風の処 織ること猶は寒し。330・橘直幹）における「雨時」と「風処」を取り入れている。これも朗詠題の「虫」は秋の景物として題の「秋望」に関連するが、『和漢朗詠集』から得ていた対句表現は題を言い換えているものではなく、破題するための表現とは言えない。また、次のように句の構成に関する表現を詠み込む場合もある。

⑬「山中花夕」題・十二番・藤原頼範（同④）

与^{山中}鳥帰林期^夕曉月 鳥と林に帰りて曉の月を期す

与^花花借宿入春雲 花が為に宿を借りて春の雲に入る

⑭「山中花夕」題・二十番・藤原兼隆

与^月月相期占緑水 月と相ひ期して緑水を占む

与^花花一夜宿春山 花が為に一夜春山に宿す

・和漢朗詠集・錢別・631・白居易

与君後会知何処 君と後会せむこと何れの処とか知らむ
為我今朝尽一杯 我が為に今朝一杯を尽せ

⑬と⑭には、題の「山中花夕」とは直接関わらないが、「与…、為…」という句の構造に関する表現が用いられている。そして、対句表現の「与」と「為」は『内裏詩歌合』において複数人の詩句

に詠み込まれており、漢詩の作成に際して共通する資料が利用された可能性が高い。さらに、⑬は『和漢朗詠集』よりも一組の対句表現「曉月」と「春雲」（用例④参照）を取り入れていることから、「与…、為…」という表現も『和漢朗詠集』から学んだと考えられよう。

このように、『内裏詩歌合』の漢詩句は、『和漢朗詠集』の表現を破題以外に利用する場合も見られる。『和漢朗詠集』の表現を文脈や内容と関係なく、言葉として利用する例および句の構造に関わる表現をセットで取り入れる例があり、『和漢朗詠集』を語彙集のように用いる姿勢がうかがえる。

以上の考察により、『内裏詩歌合』の漢詩句は、題と共通する文字を持つている、あるいは題から連想できる朗詠題を手掛かりとして、漢詩の表現を見出す傾向があるが、破題のための表現と破題以外に用いられる表現が見える。『内裏詩歌合』の漢詩句における『和漢朗詠集』の利用方法にはいくつかのバリエーションがある。

また、全体的に見ると、『和漢朗詠集』の表現をそのまま利用する場合と一部を変えて利用する場合がある。それに加えて、作者に基づいて考えると、後者は主に儒者、前者は主に儒者以外の作者に見える。『和漢朗詠集』の用い方は作者によって異なるのではないだろうか。この点については次節で詳しく検討する。

四、『和漢朗詠集』の利用方法と作者との関連

『和漢朗詠集』の表現をそのまま用いる作者は、頼範・範朝・範

宗などの歌人あるいは順徳天皇の近臣で儒者でない人がほとんどであるが、『和漢朗詠集』の表現をそのまま利用せず、一部を変えて用いる作者は、家宣・資実・範時・為長のような文章博士・東宮学士などを務めた儒者が主となる。これにより、『和漢朗詠集』の利用方法が異なるのは、作者が儒者であるかどうかに関係するのではなく、かたと推測できる。本節では、儒者である為長と資実の例を取り上げ、『和漢朗詠集』の表現をそのまま利用しない場合、作者たちはどのように工夫して用いているのかを検討してみる。まず、下記の二例を挙げる。

②「野外秋望」題・三番・資実（再掲）

隼撃^野林梢^秋飛鳥^望少 隼 林の梢を撃ちて 飛鳥^望少なし

馬嘶^野原上^望獵徒^望多 馬 原の上に嘶^いえて 獵徒^望多し

⑩「山中花夕」題・五番・為長（再掲）

一日遊春^山歸^中帶^花月 一日春に遊び 帰るに月を帶ぶ

双雲^山為雪^中老眠^花花 双雲雪と為り 老いて花に眠る

②の一句目は「隼撃」を用いて「秋」を表現し、「林梢」が「野外」、「飛鳥少」が「望」の風景を詠んでいる。隼が木を撃つ情景を描写するものとして、『和漢朗詠集』の「雁付帰雁」題に「雁飛碧落書青紙、隼撃霜林破錦機」（雁 碧落に飛びて 青紙に書せり、隼 霜林を撃ちて 錦機を破る。321・菅原道真）とあり、隼が霜の降りた紅葉の林に飛び込むと、錦を織る織機を壊すかのよ

うに紅葉を散らすという秋の風景を描いている。資実詩は摘句の「隼撃霜林」という表現を取り入れているが、「霜林」をそのままではなく、「林梢」に変えている。それは対句の「馬嘶原上」における場所を表す「原」と位置を示す「上」で構成される「原上」という表現に合わせ、「霜林」を場所を表す「林」と位置を示す「梢」の組み合わせである「林梢」に変更したのではなく、か。また、前述したように、⑩では『和漢朗詠集』の摘句における「醉眠花」の「醉」は「老」に置き換えられている。二句目の「双雲為雪」は山にある雲が白雪のように見えて、美しい髪の毛を表す雲鬢が連想される。白くなつて雪に喩えられる「双鬢」と「双鬢」のように、双雲が雪に喩えられるのも白髪を暗示しているのである。ここでは年老いたことを詠んでいると理解できる。この前半の内容を踏まえ、為長は「醉」を「老」に改めたと考えられよう。

このように、漢詩句の構成や文脈によつて『和漢朗詠集』の表現を一部変えて利用する場合が見られる。

次に、本文などを踏まえて『和漢朗詠集』の表現を少し工夫して利用する例が見られる。例えば、「野外秋望」題で詠まれた菅原為長の一聯（五番）をもう一度掲げたい。

⑪白鷺^望双飛^野秋沢^秋雪 白鷺^望双びに飛ぶ 秋沢の雪
紅梢^秋半出^望暮山^野雲 紅梢半ば出づ 暮山の雲

前述したように、この二句は『和漢朗詠集』の「山水」題に収められる「得日暮山青、簇簇、浸天秋水白茫茫（日を得ふる暮山は青くして簇簇たり、天を浸す秋水は白くして茫茫たり。501・白居易）の「暮山」と「秋水」を利用している¹²。しかしながら、『和漢朗詠集』の表現はそのまま用いられるのではなく、「秋水」が「秋沢」に置き換えられている。為長はなぜ「水」を「沢」に改めたのか。その理由について、「鷺」と「沢」との関わりから考えてみたい。「鷺」と「沢」の用例を調べてみると、漢詩では両者が一緒に詠まれる例が見当たらない。他の資料に目を向けると、『毛詩』周頌「振鷺」に「振鷺于飛、于彼西雍」（振鷺 于に飛ぶ、彼の西雍に）とあり、毛伝に「振振、群飛貌。鷺、白鳥也。雍、沢也」（振振、群飛の貌なり。鷺、白鳥なり。雍、沢なり）と見え、さらに鄭箋に「白鳥集於西雍之沢。言所集得其処也」（白鳥西雍の沢に集まる。言ふところは集まる所其の処を得るなり）という表現が見られる。傍線部が示すように、「白鷺」のいる場所が「沢」とされている。為長詩は『和漢朗詠集』の表現をある程度使いつつも、『毛詩』の注釈を踏まえて工夫して利用していると考えられよう。

また、『和漢朗詠集』の表現を用いていないが、同じように故事などを踏まえて詠むものとして、「野外秋望」題で詠まれた資実の例（四番）を挙げる。

②〇 野外 殷夢 夜静甘霖雨 殷の夢 夜静かにして甘霖の雨
野外 秋 軒楽 秋深落葉波 軒の楽 秋深くして落葉の波¹³

「殷夢」「軒楽」が題の「野外」、「甘霖雨」「秋深落葉波」が「秋望」を表現している。そして、「殷夢」は、殷の高祖が傳險の中に隠れていた説という聖人を得た故事を踏まえている。具体的には『史記』卷三・殷本紀に、

帝武丁即位、思復興殷、而未得其佐。三年不言、政事決定於冢宰、以觀國風。武丁夜夢得聖人、名曰説。以夢所見視群臣百吏、皆非也。於是遇使百工營求之野、得説於傳險中。是時説為胥靡、筑於傳險。見於武丁。武丁曰是也。得而與之語、果聖人。挙以為相、殷國大治。故遂以傳險姓之、号曰傳説。

（帝武丁即位し、復た殷を興すを思ひて、而して未だに其の佐を得ず。三年言はず、政事を冢宰に決定せしめ、以て國風を觀る。武丁夜に聖人を得るを夢み、名は説と曰ふ。夢見る所を以て群臣百吏を視るに、皆非ざるなり。是に於いて迺ち百工をして野に營求せしめ、説を傳險の中に得たり。是の時説は胥靡と為り、傳險に筑す。武丁に見ゆ。武丁は是なりと曰ふ。得て之と語り、果して聖人なり。挙げて以て相と為し、殷國大治なり。故に遂に傳險を以て姓し、号して傳説と曰ふ。）

とあり、殷を復興させようとする殷の高祖が聖人を得た夢を見て、百工にこの聖人を野に求めさせ、傳險の中に隠れていた説を得たという話である。佐藤道生氏によると、句題詩の詠法における「本文」は作者が何らかの典拠を用いて詩句を作る場合、その本文中

に句題の文字を含む必要がある。¹⁴⁾ この『史記』の本文に「使百工
営求之野」という一文があり、題字の「野」が見られるため、一
句目の「殷夢」という表現は『史記』の故事を踏まえることで題
の「野外」を言い換えていると考えられる。

また、この資実詩の「軒楽」という表現は、黄帝が天楽を奏し
た故事を踏まえている。その故事について、「莊子」外篇・天運に、

北門成問於黄帝曰、帝張咸池之樂於洞庭之野、吾始聞之懼、復
聞之怠、卒聞之而惑、蕩蕩默默、乃不自得。

(北門成黄帝に問ひて曰く、帝洞庭の野に咸池の樂を張りて、
吾始めて之を聞きて懼れ、復た之を聞きて怠り、卒に之を聞
きて惑ひ、蕩蕩默默たり、乃ち自得せず。)

と見え、北門成は黄帝が洞庭湖畔で催した「咸池」の舞樂演奏を
見て異様な感動を受けたという話である。これも本文の「洞庭之
野」に「野」という文字があるため、二句目の「軒楽」という表
現は『莊子』の故事に関わって題の中の「野外」を表していると
言える。このように、資実は作詩に際して、『和漢朗詠集』の表現
を用いるのみならず、『史記』や『莊子』などに見える故事に関連
する表現も詠み込んでいる。

これまでの考察により、『和漢朗詠集』の利用方法は、作者が儒
者であるか否かによって異なることが明らかになった。さらに、為
長や資実のような儒者は『和漢朗詠集』から表現を取り入れるの

みならず、漢詩の文脈や故事・本文などを踏まえてその表現を工
夫して利用する傾向があることが分かった。

ただし、為長と資実の詩に詠み込まれる故事の表現について、
類書を調べてみると、『文鳳抄』地儀部の「野」項に「軒皇古樂
《殷帝夜夢》」や宝貨部の「糸」項に「蜘蛛当戸《鸛鷺立波》」とあ
り、『擲金抄』双貫部の「山野」項に「軒帝樂声」「殷夢遠」と見
える。さらに、傳説や軒楽の故事本文も類書に提示されている。為
長や資実は故事に関わる表現を用いているが、それらの故事は類
書の範囲を超えていない。そして、「殷夢」および「軒楽」と共通
性の高い表現も見られることにより、作者たちは故事に関連する
表現を直接原典から取り入れたというより、当時盛んに用いられ
た類書などを利用して詠み込んだと考えられる。

しかしながら、「本文」というのは本来句題詩の詠法に従って、
中国の古典に基づき、故事の世界に入り込んで詠まれるものであ
る。佐藤道生氏が指摘するように、句題詩の詠法における「本文」
とは、句題と詩句との間に典拠の本文を置いて両者を結びつける
ものである。¹⁵⁾ 故事に関わる表現は、典拠の世界と詩句の世界との
二つの世界を詠んでおり、重層性を持っている。それに対し、「殷
夢」と「軒楽」は類書において「野」を表す定型表現として取り
上げられている。この二つの表現は本来故事に関連するものであ
るが、ここでは出典の世界まで踏み込んで解釈するのではなく、単
に題字を言い換える言葉として類書の表現を使っているのではな
からうか。これを踏まえて考えると、故事に関わる表現が類書な

どから直接取り入れられるという方法は「本文」というより、言葉の単純な言い換えが基本となる「破題」に近いと言えよう。⁽¹⁶⁾

おわりに

以上、『内裏詩歌合』の漢詩句における『和漢朗詠集』の利用方法について検討してきた。『内裏詩歌合』の漢詩句では、『和漢朗詠集』の表現を取り入れる場合が多く見られる。その利用方法は、破題に用いるものと破題以外に用いるものに分けられるが、『和漢朗詠集』における対句表現をセットで読み込む場合が特に多い。まず、破題に用いる場合では、題の文字に関連する朗詠題を頼りに表現を見出す傾向が見える。さらに、『和漢朗詠集』の漢詩句における単独の表現と対句表現を取り入れる場合があるが、対句表現をセットで利用するものとして、表現をそのまま用いる場合とそのまま利用せずに一部変えて読み込む場合に分類できる。また、破題以外に用いる場合では、『和漢朗詠集』の表現を題と関わらずに言葉のみ利用する例が見られる。

このように、平安後期からの『和漢朗詠集』の利用方法を継承して破題のために『和漢朗詠集』の表現を用いているのみならず、『和漢朗詠集』を語彙集のように使用する場合もあり、『内裏詩歌合』における『和漢朗詠集』の利用方法はいくつかのパリエーションを示している。さらに、作者によって『和漢朗詠集』の表現を利用する姿勢が異なる。儒者でない作者は、『和漢朗詠集』の表現をそのまま利用する傾向があるのに対し、為長や資実などの儒者

は『和漢朗詠集』の表現を用いながらも、故事などを踏まえて言葉を工夫して読み込む姿勢がうかがえる。それらの故事に関わる表現は『文風抄』や『擲金抄』などに見られ、儒者である詩人たちは作詩にあたって、『和漢朗詠集』のみならず、類書などに収録される故事の表現も利用したと考えられる。

類書から故事に関する表現を直接取り入れるという詠法は、典型的な「本文」というより、「破題」に近いと言える。これは当時の儒者の一般的な詠法なのか、それとも詩歌合という場であるため類書に頼って本文を用いない詠法となっているのか。そして、『内裏詩歌合』以降に行われた詩歌合の表現とどのようなつながっているのか。これらの問題についてはさらなる考察が必要であらう。同時代における『和漢朗詠集』の利用の実態とともに今後の課題として検討したい。

注

- (1) 唐沢正実「順徳天皇内裏における詩歌合の盛行について」、『語文』六五号、日本大学国文学会、一九八六年六月
- (2) 佐藤道生「句題詩概説」、「句題詩研究」、慶応義塾大学出版会、二〇〇七年
- (3) 堀川貴司「元久詩歌合」について―「詩」の側から―、「詩のたち・詩のころ―中世日本文学研究―」、若草書房、二〇〇六年（初出：同題『国語と国文学』七一一、一九九四年一月）
- (4) 海野圭介・滝川幸司「十七番詩歌合」解説、「詞林」、卷十九、一九九六年四月
- (5) 佐藤道生「和漢朗詠集」、幼学書への道」、「三河鳳来寺旧蔵曆応

二年書写 和漢朗詠集 影印と研究(研究篇)論考、勉誠出版、二〇一四年(初出…同題「和漢比較文学」三十六号、二〇〇六年二月)「・」は題字、詩句の横に記している文字は各表現が対応する題の文字を示す。

(7) □部分は「内裏詩歌合」の題(「山中花夕」「野外秋望」)に関連する朗詠題、傍線部は「内裏詩歌合」の漢詩句と「和漢朗詠集」と共通する表現を示す。

(8) 山田尚子氏が「詩序の句題と朗詠題とが一致するか、或いは一致しないまでも何らかの関わりを以て互いが連想される関係にあり、詩序の製作において朗詠題が果たした役割の大きさを窺うことができる」と述べるように、「詩序集」においても同じような朗詠題の用い方が見られる。「詩序集」の破題表現と「和漢朗詠集」、「中国故事受容論考—古代中世日本における継承と展開—」、勉誠出版、二〇〇九年/初出…同題「句題詩研究」(同注2)

(9) 菅原道真のこの一聯について、「和漢朗詠集私注」には「煙霞、桃李者、花時之意也」とあり、「煙霞」と「桃李」は句題の「花時天似醉」における「花時」を表すという句題詩の破題に関する記述が見られる。経高詩は「煙霞」と「桃李」を用いて題の「花」を言い換えるのは、私注など「和漢朗詠集」の古注釈を利用した可能性も考えられる。ただし、ほかに古注釈を利用したと考えられる例は少なく、「内裏詩歌合」および同時代における「和漢朗詠集」の古注釈の利用方法については、今後の課題としたい。

(10) 「花」については、破題の表現を集めている「文鳳抄」草樹部の「花」という項目に、「春 雪 霞 露 雲 錦 紅 白 艷 粧 色 気 香 匂 薫 染 開 落 散 (以一字有花意)」とある。「花」を言い換えるには「春」や「雪」などの言葉を利用できると示されている。そのため、「春」から「花」も連想できると考えられる。(11) 本句は「千載佳句」春遊・八五九にも見られるが、全体的に見る

と、「内裏詩歌合」の漢詩句は「和漢朗詠集」からの表現を多く取り入れているのに対し、「千載佳句」の表現を利用する例はまれである。それを踏まえて、こゝも「千載佳句」ではなく、「和漢朗詠集」から取った表現と考える。

(12) 為長のこの二句は「新撰朗詠集」「眺望」題の摘句「紅林半落寒山透、白鷺斜飛遠水長」(紅林 半ば落ちて 寒山 透けり、白鷺斜めに飛びて 遠水 長し。589・藤原淳宗「長楽寺」)の傍線部の表現も用いていると考えられる。「内裏詩歌合」における「新撰朗詠集」の利用は、他にも数例あるが、本稿の趣旨とは異なるため、稿を改めて論じたい。

(13) この一聯は「新撰朗詠集」「蘭」項目の「波句遠覚吹秋水、雨染高和動暮雲」(波句ひて遠く覚る 秋の水を吹くことを、雨染めて高く和す 暮雲を動かすことを。272・菅原文時「蘭氣入輕風」)における「雨」と「波」を利用している可能性も考えられる。

(14) 佐藤道生「平安後期の題詠と句題詩—その構成方法に関する比較考察—」、「句題詩研究」(同注2)(初出…同題「和歌文学研究」九十号、二〇〇五年十二月)

(15) 同注14。

(16) この点については別稿(「内裏詩歌合」の詠法について—漢詩句を中心に—、投稿中)に論じている。

引用テキスト

内裏詩歌合・和漢朗詠集・新撰朗詠集・新編国歌大観
法性寺殿御集「日本詩紀 本文と総索引」(高島要編、勉誠出版、二〇〇三年三月)

毛詩 —「十三經注疏附校勘記」(中華書局、一九八〇年)
史記 —「史記」(中華書局、一九五九年)
莊子 —四部叢刊初編「南華真經」(商務印書館)

擲金抄 一 国文学研究資料館編『真福寺善本叢刊』第十一卷『擲

金抄』（臨川書店、一九九八年）

文鳳抄 一 本間洋一『歌論歌学集成 別巻二』（三弥井書店、二〇

〇一年）

※本資料では、引用に際して、漢字を通行の字体に改めた。また、漢詩の書き下し文や引用文の傍線・囲み部分は発表者に拠る。

付記

本稿は、令和五年度一月七日に行われた、大阪大学国語国文学会における口頭発表に基づく。発表の席上、発表後に御教示を賜った先生方に深謝申し上げる。

（こう・むこう 本学大学院博士後期課程）